

## 幼小をつなぐ学びと育ちの連続性の共有

—子どもの意欲をつなぐ小規模校園における実践から—

○丁子かおる（和歌山大学教育学部）奥村 孝（和歌山市立雑賀崎小学校・幼稚園 校長）  
太田英一郎（和歌山市立雑賀崎小学校 教頭）中井麻由（和歌山市立雑賀崎幼稚園 教頭）  
青木菜莉（和歌山市立雑賀崎幼稚園）太田由美子（和歌山市立雑賀崎幼稚園）数見佳子（和歌  
山市立雑賀崎幼稚園）角 忍（和歌山市立雑賀崎幼稚園）池谷義輝（和歌山市立雑賀崎小学  
校）北野美和（和歌山市立雑賀崎小学校）木下雄生（和歌山市立雑賀崎小学校）白井千聡（和  
歌山市立雑賀崎小学校）出口 静（和歌山市立雑賀崎小学校）西川菜々子（和歌山市立雑賀崎  
小学校）森本孝子（和歌山市立雑賀崎小学校）中西 大（和歌山大学教育学部附属小学校）

### 1. 研究の背景と目的

#### 1. 研究の動機

人生のスタートとなる幼児教育を質の高いものとして小学校以降の教育に継続していくことは子供の生涯の学びに影響を与える。J.ヘックマンらのペリー就学前プロジェクトなどの研究から質の高い幼児教育を受けた子供はその後の成績、犯罪率、収入、健康などで様々な良い影響をもたらすとされている<sup>1</sup>。そのため、令和元年より幼児教育の無償化が政策として行われ、幼児期からの質の高い教育・保育が、小学校以降の教育に滑らかにつながることで、個人と社会の育成に貢献するとされている。

幼小接続においても幼小の定期的な交流については多くの学校園で行われるようになり、小学校では各校で幼小連携担当者を中心にスタートカリキュラムの編成なども進められるようになった。ただし、現実的には幼小接続は就学を控えた幼稚園年長児を対象として行われることが多く、その目的は、接続期を中心に、就学した児童が小1ギャップを乗り越えることに焦点が当たることが多いように思う。幼小合同で授業・保育を共有し、協議を継続的に行うなどすることがなければ、幼小教員で互いの教育方法や考え方の違いを受け入れ、教育・保育を創造する営みにつながることはない。そこで、小規模校であり、日頃から子供たちが行き来する環境にある雑賀崎小学校・幼稚園において、日常の連携に加えて、互いの教育を学び合い、子供を理解する機会として本共同研究を位置づけ研究を行ってきた。

#### 2. 研究対象校園における研究の前提

幼稚園年長児は、就学への不安と期待が入り混じる時期であり、就学後には多くの児童が小学校での45分刻み授業や指導方法の違い、生活の仕方の違いに戸惑いを感じている。登下校一つとっても、就学後は子供だけで行うようになるなど、不安は大きい。

ただし、幼児の頃からAちゃんを小学校教師が知っていて、教員間で交流があれば、就学を控えた幼児のみならず、その保護者も就学後も安心して学校との関係を保っていける。

小学校教師は、A ちゃんが苦手なことのみにならず、A ちゃんの良いところ、仲の良い友達などをその時々で幼稚園教師と共有していることで、就学した後も A ちゃんを想定した授業を行える。児童は小学校に入っても自己を発揮しやすくなり、学びを継続しやすくなる。こうした土壌が雑賀崎小学校・幼稚園にはあると思われる。

図 1 研究会実施状況

	日時	内容	場所
第 1 回	9月9日(木) 5時間目 13:30~	第 1 学年生活科研究授業と協議会	雑賀崎小学校
第 2 回	11月5日(金) 9:00~11:30	地震防災保育・教育	雑賀崎小学校 体育館
第 3 回	10月14日(木) 15:30-16:45	3 歳児園内研究保育と協議会	雑賀崎幼稚園 遊戯室
第 4 回	11月11日(木) 15:30-16:45	3 歳児ビデオカンファレンス	雑賀崎幼稚園 遊戯室

### 3. 研究の目的と方法

本研究では、小規模校園の特色を生かして日頃から児童と幼児が行き来し連携をしている雑賀崎小

学校・幼稚園において幼小の教員が合同研修を行い、幼児期から児童期にかけて9年間の育ちと学びを共有する。また、協議を行う過程で、小学校と幼稚園教育についてその特性や指導と援助・支援の方法の違いなどについて共通理解を行い、発達に応じた指導と支援・援助について見方や方法について視野を広め、評価し改善につなぐことを目的とする。教員が幼児・児童の育ちと学びについてみとりと教育内容や方法について幼小教員間で理解を深めることで子供は安心感を持って学びを継続できる。そこで、本研究を通して子供が主体となって教え合い学び合える子供を育むべく9年間を見通して教員の資質・能力を高め育む小規模校・園によるより良い教育実践を目指すこととする。

そこで、本研究では、第1回：第1学年生活科研究授業と協議会、第2回：地震防災保育・教育の共同での実施、(科研による共同研究であり別途報告<sup>2)</sup>、第3回目：3歳児園内研究保育と協議会、第4回：3歳児ビデオカンファレンス実施し、その成果をまとめる。(※ただし、新型コロナウイルス流行のため限られた期間での実施となった。)

## II. 幼稚園と小学校各教員による合同研修会内容

### 1. 小学校1年生生活科授業見学と協議

第1回目の9月9日(木)は、小学校1年生A組7名の生活科の授業を見学し、その後、協議を行った。授業内容は、小単元名「ようこそ 小学校『雑賀崎1A お楽しみ隊♪』」で、後に幼児と1年生がお互いの良さを理解し合い、助け合いながら児童が学習に向かう姿を目指し、宝物探レクイズや昔遊びを協力して取り組む学習が計画されており、この日は、この小単元の初回で、1年生児童が「宝探しみたいに クイズで探検、楽しそう」の授業を行った。(※2021年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため多くの取り組みが秋以降に延期

された。)この授業では担任の支援の下、事前にB児が宝のありかを示すクイズをつくり、学校中に隠し、そのクイズカードをクラスの児童が学校探検をしながら宝探しをした。その際、クイズにある場所の特徴から答えを話し合ったり、協力してカードを探したり、B児が友達にヒントを出すなどして宝探しを楽しみ、その後、活動への気付きとよりよくする工夫を振り返って話し合い、後に幼児と学習を行う意欲につながる活動となった。

授業終了後における教員間での協議では、授業を参観した幼稚園教員から、「授業者が子どもを大切に話を聞

いてくれるので児童同士も話を聞く、待ってくれる姿があり、心動く場面がたくさんあった。」、授業者からは「幼稚園の遊びの中で培った遊びの力がB児にはあるため、子供同士がつながっていける。」という言葉があった。校園長からも幼稚園から小学校に子供の良さを話し合っただけで認め、引き継ぎできる協議であったという評価がされた。



図2 合同教員研修会の様子

## 2. 地震防災保育・教育

11月5日(金)には、小学校体育館にて幼小合同での地震防災教育・保育を本共同研究メンバーに加えて高知大学工学部山田伸之先生を講師に加えて、昨年に引き続き行った。詳細については別の機会に述べることにするが、昨年度に経験した学習内容であったため、教員のみならず小学校6年生が事前に練習したダンゴムシのダンスを下級生や幼児に教えたりトンネルをくぐる際に励まして声をかけたり避難時に幼児の手を引くなど主体的に関わって実施できた。昨年に続いての実施であったため、教員間での共通理解が継続して実施できた。

## 3. 3歳児園内研究保育と協議会

10月14日(木)に雑賀崎幼稚園にて、3歳児たんぽぽ組7名を対象に「身近な環境にかかわり、生き生きと遊ぶ子供を育てる～豊かな学びが生まれる保育者の援助とは～」を研究課題とした園内研究保育を参観し、その後、協議を行った。

保育では、砂場でのごちそうづくりやごちそうごっこ、水や土、ドングリ、虫などの自然物や生き物に関わっての遊びなどがあり、その中で自分のしたい遊びを幼児が試す姿や保育者との関わりの中でイメージを広げていく姿、友達の遊びに興味を持ち、友達の遊びを真似ながら一緒に遊ぼうとする、幼児なりに友達を気遣う姿など3歳児が落ち着いて遊ぶ姿

がみられた。

協議では、小学校教員より「普段では3歳の保育をみることがないので貴重な経験であった」「幼児に教師が声をかけた援助で、虫について幼児が思考を広げられた場面があった。」  
「靴下を自分で脱いでからあそぶなど3歳児なりの生活力がみられた」「友達と遊ぶ以前の、先生がいて友達と関わる幼児の姿が興味深い」などの意見があり、接続期の年長児以前の3歳児クラスの幼児についての保育を共有することで、幼小教員で子供の発達に応じた支援と援助について理解が広がった様子があった。

#### 4. 3歳児保育ビデオカンファレンス

11月11日(木)には、雑賀崎幼稚園遊戯室にて幼小合同研修で3歳児の9月時点での虫捕りの遊び場面についてビデオを視聴し、保育者による説明の後、教員間で協議を行った。ビデオは保育者が撮影し、協議では子供の姿と保育者の言葉がけを基に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の資料などを参考にしている。

協議では、小学校教員からビデオの中の子どもの姿として「思考力の芽生え」「協同性」の姿を、また、加えて「自然との関わり・生命尊重」「言葉による伝え合い」の姿が、遊びの場面から見られたという意見があった。また、小学校教員の質問から保育におけるねらいの持ち方やビデオにある3歳の9月と協議を行っている11月では保育者は(幼児が自分でできることを増やすため)関わりを減らして援助していくなど発達に合わせた援助についても保育者より説明があった。小学校教員から「(保育者が)幼児本人の気持ちを代弁して話してくれるので、幼児同士が伝え合っている」という関わり方についても意見があった。そして、「研修で動画をみることで1年生児童が幼稚園での経験で育ってきたことが振り返ってみられる」や、この研修を行った日も3人の幼児が小学校まで虫捕りにきており、その際の姿についても幼稚園に紹介があった。研修を通して、保育者による指導・援助方法の理解や遊びで育つ子どもの姿の理解、子どもの今の姿まで広く共有がされたことが分かる。

### Ⅲ. 共同研究の結果と成果

#### 1. 成果

教員より収集した自由記述による結果(13名)を以下に記述し、その成果について内容ごとに件数をグラフ(図3)にした。感想の他、学校園や自らの学びとして成果を積極的に記載していたのは、校園長を除いた12名のうち幼稚園教員で4名、小学校教員6名の8割であった。得られたデータは、結果、自由記述で**教員の資質向上**を成果として挙げたのは幼稚園と小学校教員のいずれも5割と多かった。そして、幼稚園教員は特に**9年間の見通しと互いの教育理解**について記載した全員が成果を示しており、小学校教員は**指導方法の視野拡大と資質向上**がそれぞれ5割、**9年間の見通しと互いの教育理解、子供のみとりと理解**は3割として広く成果が書かれてた。つまり、幼小教員間で得られる成果については違いがあり、幼稚園教員は互いの教育理解を深めたことで9年間の見通しが持てるようになって

いったことを、小学校教員は幼児教育も理解し、子どものみとりと理解を深め、9年間の見通しを持てるなどして、保育者による指導や援助から視野を広げる機会になり、資質向上につながったと感じていると読み取ることができる。

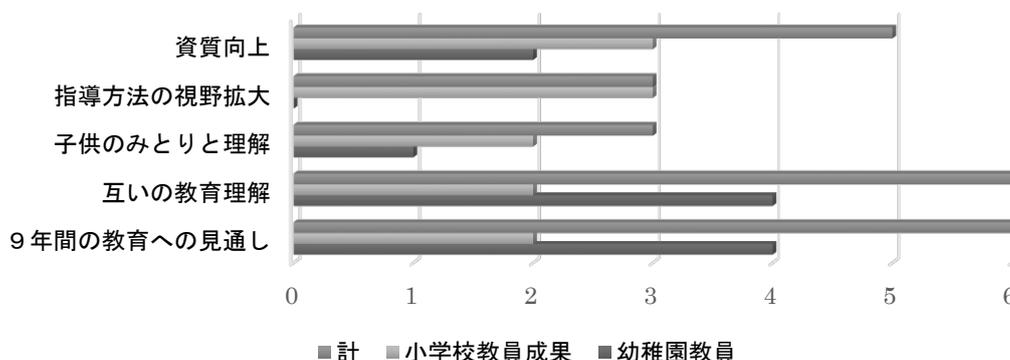
#### □幼稚園教諭による成果についての記述

- ・学びがどのような育ちにつながっていくのか共通の場面から具体的に考え合うことができたのではないかと考える。(9年間の教育への見通し、互いの教育理解)
- ・小学校の先生方と互いに歩み寄り、学び合ってきたことで幼稚園での学びが小学校での学習のどんな部分につながっているのかというのを具体的に知ることができたため、毎日の記録の中で子どもの学びが見とりやすくなった。(9年間の教育への見通し、互いの教育理解、子供のみとりと理解、資質向上)
- ・幼児期の豊かな経験が小学校の学びに向かう力の土台となっていることが小学校の授業をみて感じられた。また、小学校の先生が個々の気持ちや発達に応じた言葉のかけ方も幼稚園と差がなく、子供達も安心して1年生のスタートをきることができると感じた。(9年間の教育への見通し、互いの教育理解)
- ・幼小合同での研修は、学びのつながりを紙面上で認識していたものを、実際の研究授業を通して実感することができた。(9年間の教育への見通し、互いの教育理解、資質向上)

#### □小学校教諭による成果についての記述

- ・保育の実践から細やかな子どものみとり、丁寧な声かけ等、一年生の授業にも活かしたいところを学ぶことができ、幼小現教で互いに意見交流することで、さらに研究を深めることができた。(指導方法の視野拡大、互いの教育の理解、資質向上)
- ・幼児教育の目指す10の姿から児童の行動や発言をみとり成長を見ることは新鮮な体験でした。基本的な学びや成長の姿をもとに子ども達の成果を見ることは小学校学習過程にも必要なことであり、幼稚園教育からの変化や目標の推移が見られて良かったです。(9年間の教育への見通し、互いの教育理解、資質向上)
- ・特別な支援が必要な子どもの言動とそれに対する保育者の先生の関わり方を中心に見せていただきました。愛着形成につながる関わり方は特別支援においても“愛着障害”と関係し

図3 幼小合同教員研修の成果項目別



てくるので学びとなりました。(指導方法の視野拡大、資質向上)

・入学してきた子供が幼稚園在園時よりも成長している様子を具体的にとらえることができる。また幼小9年間の成長を見通した支援ができる。(子供のみとりと理解、9年間の教育への見通し)

・異校種を知ることにより、子どもの活動や学習の様子についての“なぜ”が教師にとってわかるものになると思われる。(子供のみとりと理解、指導方法の視野拡大)

## 2. 幼稚園及び小学校教員による感想とその他

新型コロナなどの感染症対策などで日頃よりも多忙な中、本研究について幼稚園、小学校、大学との教員間での意見交換において、計画段階で一部、不十分であったという意見があった。ただし、幼稚園教諭からは、「子どもの学びや育ちの課程について継続性をもち幼小の教員が共に学び合える環境を今後も望む」という継続への意欲、「小学校でも“つながっている”“一連の大切なつながりだ”と感じていただけだ」「自分たちとは違う視点で保育を見て、意見をいただくことで学びの発見」といったことなどが感想で書かれた。小学校教員からは、「自ら学ぼうとする姿、発見したことを共有しようとする姿、全てが保育の段階から始まっていて、そこをもっとのばしていけるような教育を目指せないといけないあと感じました。」と、幼児期の学びを小学校でもつないでいく必要性が書かれ、各教員の資質向上や今後への意欲につながっていることが分かる。

### 奥村校園長

「私たちは子ども達にとって安全で安心して“今、ここ”に在り、自由に遊ぶことから社会と関わり生きる力を育みたい、養いたいと思います。そばに寄り添う教職員の幼児・児童理解の深化のみならず、子供達の心の安定、身体の健康等の土台作りがまずあってのことといえると思います。」

※丁子先生には、本校園の姿を俯瞰していただき、指導助言をいただいています。教職員が子ども達と安心して関わり、子どものみとり等から自由に話し合え、認め高まり合える教職員集団として成熟することを願っています。

以上が、この度の雑賀崎幼稚園・小学校の合同研修と和歌山大学との共同研究の成果である。幼小交流や接続として子供の学びを接続することの重要性と同時に、教員間で9年間を見通しての教育を行うことは、幼児教育政策の根本にある課題である。その意味で、本研究がその一部として役立てられることを願っている。

(研究協力者：教育学部4年 宮井菜緒 3年 隅田真帆 津村茉優)

<sup>1</sup> ジェームズ・J・ヘックマン『幼児教育の経済学』東洋経済新報社, 2015

<sup>2</sup> 科研費での調査であるため別途報告する。2021.11.11 読売テレビ、NHK 和歌山などでも紹介された。